

特67

409

赤の髪
新狂言
春木座

新狂言
春木座



074885-000-5

特67-409

春木座新狂言筋書

松応堂

M16

CEK-0316



雨夜伽累譚

○春木座新在言一巻目

- 序 幕 絹川堤巡見の場
- 二幕目 鶴の臺錦ヶ淵の場
- 同 市川汀出合の場
- 三幕目 鹽山寺村境の場
- 同 佐兵衛住家の場
- 同 奥右衛門内の場
- 四幕目 刑部邸物見前場
- 同 六間川助作殺場
- 五幕目 結城家別荘の場
- 同 中川沖船中の場
- 六幕目 飯沼私經寺の場
- 七幕目 絹川堤黒殺の場
- 八幕目 佐兵衛隠宅の場
- 同大詰 八幡宮祭禮の場

第二巻目

隅田川樽高樓

- 序 幕 高屋繩手道の場
- 同 阿佐谷一ツ家場
- 同 鳥越山狩殺の場
- 二幕目 馬加大肥郎の場
- 大 切 對牛樓仇討の場

役割

- 權十郎 西入權六、大田小文吾、小團次、仲間金五郎、舟出
- 善美之丞 若徒惣助、傳五郎、佐兵衛、馬加大肥
- 高助 祐天上人、大坂毛野、三津三、お重、千鳥、芋
- 源之助 正光、花友、戸牧、右團次、累助、作、絹川、谷五郎

○序 幕 絹川堤巡見の場

本舞臺二重草土手正面野山の遠見下手お茶見世上の方お月星の紋を附し幕帳都て絹川堤野邊の休幕の内よりお民お園の田舎娘出で火鉢よて團子を焼居る側お熊平吉内と云仲間立懸り爰へ庄屋太郎兵衛兵右衛門出で今日ハ千葉の殿が堤普請の修巡見として此邊を御通行ゆる下總二百八十四ヶ村の美婦を撰み殿の女お仕立修覽お入る其の中お羽生村のお熊の娘累が器置よし(太郎)はんお大名お成りたいものト云時向ふより佐兵衛の娘若紐(千鳥)出来るを見て(兵)コレサ娘方何でも殿様の修目お留る様よせよやあらぬぞやト演詞のうち上手より侍 兩人出て只今殿の修通行静お致せと先拂の後大勢の供廻りと共お千葉之助正胤(源之助)出来り床几お腰をうけ以前の庄屋兩人が三人の娘お茶を汲せ殿の前へ出す娘お取うしお仕打よて恐るく茶を持出る顔を正胤お見とれる(正)コレ娘手お屋敷へ奉公致す氣おいり(若)私くしのやうおる

者(支番)爰佐兵衛より開拙者能お取計らい修愛爰お差上させんと云人時佐兵衛出来り喜祝是れて正胤お莞爾として(正)宜き吉左右を相待居ぞト昔々花道へは入後修續お私しやお屋敷へ行事のいやト云佐兵衛お親の心子知らず其構成事をすさ近邊の豊年踊りでも見や(娘)アイ〜と三人の上手へは入後支番お佐兵衛お向ひ娘をよばお女色を以て心をどらうし千葉の家を押領おさんと密談し常家の執權刑部殿おやし上んがお重お穴おあふてハ玉ささづ切お生界のすたりものト云ふ時「修續お出来り顔見合て支番先お佐兵衛おらみ上手へは入後上手の茶店籠の影より金五郎(小團次)仲間お拵へよて楊枝をくわへ醉さめおて出きたり(金)今の女を殿が見染るも尤も此金五郎様でもお見染遊ばした男お生れたららぬぞふの一晩ト修續の後を見送る爰(上手)以前の仲間(熊平)吉内出でヤお金刑部様のおうへりお早くゆけ(金)今の女の内を察おとめるトひよる〜ト床几お腰を掛る切

うけにて幕

○二幕目 鴻の盛鐘ヶ淵の場向市川の場舞臺三間の間二
重岩組杉の立木上手より石碑あり都て鐘ヶ淵夜の休爰よ
悪者四人焚火をして酒をのんで居る(悪者八藏百姓の娘
だう年の頃十六七黒髪が宜いゆゑ引さらし船に乗此下
の辻堂へ縛つて置た(熊)そいつの強氣な仕事(八)イヤ外
よ上仕事があるのよ法恩寺村の名主の娘が領主の妾よ上
ると云ふ所しだぐ上玉ゆゑ引さらつてばらす時二三本
ふり成る仕事編で來のを高窓で見張て居るの(熊)す、
胸をすれハ影とやらちらちら見へるアノ提灯と皆々明き
上手へと入る後ばたぐみ成り向より下部村平(銀之助)
一本ざしにて出來る續て若徒の惣助(善美之丞)追馳來て
兩人立廻り村平の持し密書を谷間へ落す是かて村平惣助
抜刀よありはげしき立廻りの末ど、兩人二重へ上る此岩
組だんぐよせり上るト山幕を切ておとす

○本舞臺正面顔小屋の辻堂下手葉屋根越りこいの小家お

庭をわろし後口一而市川の流れを見たる遠見爰へ金五郎
の仲間出來り(金)刑部様のお頼みで大角修理と云ふ大名
様お身をいでたち首尾能名鏡り奪ひ取つたが大名の一日
でこりくしたト向ふを見てアノ提灯の千葉家の紋今日
妾が上ると聞て居たが爰で逢たハ調度幸ひ日頃の思ひを
ム、そふト金五郎ハ小隠をする後向ふより紙打の駕侍
付添出來るを以前の悪者四人出で繩を取悪女を渡せト打
てりくる仲間悪者立廻りの末編をさらつて悪者の上手へ
と入る後附添の侍與太右衛門が胸くりし跡を追懸は入る
入れ違つて四人の悪者芋積をどらへて出來り芋積の帯を
解手込せんとする折「ヤイ此奴等ハ此女中を何とする
のだト金五郎出て留る(八)此女を念佛講よした上で(熊)
旅へ賣て金よするのだト四人金五郎お打て懸るを双方へ
投のける悪者ハ胸りして向ふへ逃入る後金五郎が芋積の
手をとつて引寄る芋積ハ逃るを帯を取つて引戻し捨石へ
腰をうけ(金)忘れもしねハ跡の月領主の殿が巡見の其時

見染た金五郎今爰でおれよ抱れて寐ればよしいやどぬり
せばおれも一所お死ぬ覺期ト脇差を抜て眼先へ突出すよ
(芋)今おまへよ穢されてハ女の道が立ぬゆゑ是はばツウリ
ハ堪忍してト逃るを追廻し胸盡しを取り殺さうとするに
驚き心よ隨ひ升と云金五郎ハ莞爾して一所よ來るト芋積
の手をどり下手の小家へは入る「是よ月が隠れるト向
ふより仲間箱提灯を持先お立跡より西入權六(權十郎)袴
大小おて出來り仲間提灯火を源助のどころへ参り附て
參れと云仲間ハ「イヤ畏まりましたと引返し行權六ハ辻堂
よ腰をのけるト辻堂の内おて物首がするお驚き狐格子を
開くと中より累(右衛次)島田のづら娘の袴(おて猿轡と
掛られ繩おて縛られ居るに驚き權六ハ繩手拭を取りのけ
(權)如何する分よて此辻堂お入れしや(おますすせ累)
ハイ私ハ羽生村の者でふり升が今朝草薙お出ました處
悪者よとわりされ難儀いたし升物お助け成されて下さ
れませト云權六ハ感然の者「然れば拙者を送り届けます

んと立上る「雲間をもし月影よ姿を見れば嫁入さのり
ト双方見どれる累ハ瘡を起す是より色身の仕打あつて家
來の歸るを此辻堂で暫時の間と累の手をとり兩人辻堂の
内よは入後以前の金五郎と芋積小家の内より出來り(金)
サアあんまり更ねハ内よ屋舖へ行(芋)私しやモウお屋
舖へ行のいやよあつたわいなア(金)ム、おれお連て逃
るどり(芋)アイ女房よして下さんせト云千葉の屋舖へ
足を抜てハ少し都合が悪いくら殿の妾お成つてくれ後ハ
必ず女房おすると袋入の鏡を出して芋積よ渡す芋積ハ受
とり懐中へ入れるとたんよ辻堂の内より以前の累權六出
るを金五郎芋積ハ呷り手を引て上手へ小隠をする後兩人
出來り(權)スリヤ以前屋舖よ勤めたる與之助が妹ありし
う(累)ハイ親父さんの九年跡此世を去今もぼりく名前
ハ是よ記してふり升ると鎌を出す權六鎌をどり(權)ナ
下總國羽生村住堀越與右衛門所持ハチ思ハバ奇過な今夜
の山會(累)知らぬお方と辻堂で(權)結びし縁も一樹の蔭

思へば不思議と權六密書を拾とり開きて月明りよすのし
見る爰へ以前の金五郎学績窺ひ出来り(幸)そんならもし
や此鏡(累)ヤそらいふ燈(累)さんか(累)チ、学績さ
んりト無言場よきり金五郎の密書を引たくる此内上手よ
り村平下手より惣助出て六人のさぐりとありト、密書の
金五郎の手入り鏡の学績の手入戻り兩人の花道へゆく
權六エ、曲者と録を打付る金五郎の受留る双方引ばりの
見得て暮

○三幕目 靈山寺村入口の場

舞臺正面草土手野の書割左右村處々あり都て村入口
の体爰は百姓四人勘稻をたばね居て(百)コノ助作との
堀越の家を相續する人だぞ繼母お熊めが邪見ゆゑ今いあ
わして名主どのの内下男こそしていれと糺して見れば
伯父の家と百姓清三郎が死だ後佐兵衛が重の後見おは
入りお重が十六才よあれの家を渡すを渡さず實子の娘等
權を領主の妾おわけて威張らしお重どのの下女同様お

遣ひ又佐兵衛の姉のお熊めい如何に繼子じやとて與之助
の勘當し助作どのの下男奉公お出し實子の累一人を愛し
兄弟共お悪者じやチ(畑)此度累の好みでお屋舖へ侍女よ
だしと此筋の演詞ある向ふより管沼佐兵衛(傳五郎)出
來り一同の百姓をけんどんお呵る百姓の佐兵衛を勝りお
から上手へと入る後玄番來り二重は腰をのけ(玄)刑部殿
と心合せ西入權左衛門を塾居させ百姓共より用金を取
立押領さん工みり如何致せしや(佐)近日上納致させ升
ると云ふを玄番の膝を進ませ此家の家付娘アノ穴なしの
お重は子に有るチ(佐)シテ片輪者が如何して子を産まし
たりと云ふ時下手よりお熊を(喜知六)先お渡し守の太
平次抱子を懐ろへ入れ出來り此子に全くお重の子に相違
ないト臍の緒書を見て(佐)ナンメ堀越助作傳助吉叔の助
作お重の中へ出來た小びつちよりト怒る玄番佐兵衛お熊
密談してお重の所持する譲り狀を巻上此家を丸呑ました
上お重を刑部様へ差上げ手宛金を頂戴しやうと玄番佐兵

衛お熊のいそぐして上手へは入る後(太平次)今佐兵
衛の約束通り此仕事を仕懸せ五十兩とい有難いと赤子の
天窓をくわすを切のけに道具廻る

○同 村長佐兵衛住家の場

本舞臺舞臺根都て大庄屋盛盛の模倣爰に堀越助作(右
四次)下男の袴らへみて飯を焚て居るお重(三津三)島田
切櫃の着附よて針仕事をして居下男作兵衛悪口し助作を
喰潰しと云とお重が残念なるを助作が私か悪いのじやと
わやまるより作兵衛の桶を荷以下手へは入る後お重の泣
伏(重)せめてい母さんう親父さんが生て居て下さんした
ら私しとおまへ迄此憂目の見まのものはんに因果を身の
上(助)其うおしみの私しも同じ二親も死お分れ弟の勘當
されまよしい親の邪見おらあさぬ伯父の飼殺し薬一服吞
事から牛馬同様お賣遣られ(重)私しとれまへに従弟ど
ふし片輪を私しを女房お持てやろうと云おまへの詞添寐
のしでも交りのあらぬ此身かふしぎにもおまへの胤を身

おやとしたの實は合點が行ぬわいあト奇添色氣の仕打爰
へ向ふより以前の太平次トお弁出來り助作さん内居
る(ト)銀之助)のお弁入來お兩人の驚き飛のくをお弁
の抱子を出し此子を引取て呉ると大聲上て掛合お重の伯
母さんお驚してある其子の事静まして下さんせと云此
内門口立開せし太平次入來り仲裁は入れ共お弁の
少も聞ずたつた今里扶持を受取と云お重の帶留の内よ
り譲り狀を出し是の實の親父さんおら實て置たる田地
其他の譲り狀ゆゑ預けて置弁ゆゑ暫時の猶豫を頼升と涙
ふぐみてお弁の前へ出す(お弁)そんなら是が先旦那清三
郎様死れた時此跡式を譲ると云お重さんへの譲り狀渡
すぞ有かれバ待てあげやうとお弁の懐中して向ふへは入
る後太平次の態を涙をさぐし子送した兩人が中是くら
い力おあまつてやろふ佐兵衛どのの此家をマダお重さん
へ渡さぬと云時奥より佐兵衛出來り(佐)よくも大それ
た事おやアがつたな此伯父をぬくくどだまし穴あし

片輪者云ふらし私子送つてつそり拵らへない不呼野奴
 サア〜兩人共出て行やアケれと引すり出すを佐兵衛の
 女房お咲(花友)出で止め何卒此家をお重と渡して下さん
 せ改め云でいあけれ共私し等夫婦の此子の後見(佐)エ、
 だまれ〜兩人共早く出でうせろ(太平次)サ、佐兵衛さ
 ん元を知れ〜此家の誰知らぬ者もねへお重さんの實親
 清三郎様の子だ、先旦那の妹共お咲さんと忍びわい出来
 た其子の苦難我と違ふて清三郎様のお心よしお田地を
 分て別家さし死された跡の後見の身分としてお二人を追
 出すといお重さんや助作さんの心の内が思ひやられるト
 つばを眼で付わざと泣仕打(佐)大程遠いふ事あら譲り
 惜ひ身代をれと皆おめんと譲つてやらうらら譲り状を出
 せ(重)讓狀の金の代りお今お弁さん渡しました(お咲)
 其金の私しお出して送うら早く取戻して来と巾着の内よ
 り三兩を出すお重り三兩と受取下手へ行と(太)女遊人で
 の無用心私し一所へ行ましやうと外を見る處へ驚か通

るを呼女を登人乗て呉ると頼む親屋の承知する(お重)夫
 の勿味をふんす(太)サ、女の足でい手間おれると無利
 よお重を駕乗せる(重)ア、レナし鳥渡待て下さんせト手
 招きをして助作を呼助作の親の傍へゆく(重)モ、助作さ
 ん侍て居て下さんせト親の向ふへは入を助作の門口より立
 ばんやりと親の跡を見つめて居るを佐兵衛の後より助作
 を外へ突出し戸を切(助)モ、伯父さん私し何するの
 (佐)やうましいお重お家を譲つたらら、愛の名前共其女
 ん手を附た不持な野奴何國へありとも出でうせろトお咲
 止るを佐兵衛怒りア、ンナ馬鹿野郎お此家の相續人よ
 させぬコレ若イ者村境まで六尺棒よて助作を還立ろとい
 ふ若イ者四人出で助作を打擲するお咲見棄て留る(皆)
 皆)サアキリ〜行ぬいと追立る助作の泣きながら向ふへ
 は入る後門口お泣伏以前の太平次の邊を覗ひおから出来
 り(佐)太平次(太)旦那カとよく〜お重をだまし込代官
 送つつぎ込刑部様から二百兩取て来ましたト金を出すお



咲の是を聞、悔りして内へ入り(咲)合點の行ぬ今の詞
 (佐)讓ると云の皆お偏りお重の千葉の刑部、貳百兩は賣
 切よト金を出し差爾する(咲)扱も非道の夫の心(佐)エ、
 やのまし(太)旦那はふしやト手を出す佐兵衛百兩包
 の封をねじ切道具まこる
 ○同返し羽生村與右衛門の坊
 平舞臺上手一間の障子正面押入下手敷だ、み松の立木都
 て與右衛門内の体愛お百姓善太お熊お辨赤子を抱茶碗酒
 を呑で居る向ふより以前の助作骸のいたむ仕打て出来
 りゆめんささいト内へ入りお重さん居られ開ト聞イ
 ヤお重さんいまだ来ぬと云ふ(助作)いふしんお思ひ何
 をお隠しませうお辨さん抱てゐる其子のお重さんと私
 が中お出来た子でムり升る(お熊)ヤ、馬鹿野郎人ダ
 問もせぬ事をべら〜とどよした此のさ二人の中の子
 トやそんならお重お替つて今里扶持を拂ナ(お弁)ア、お
 重の尻くせお悪く色男お澤山あり渡し守の太平次其外お

も三四人有ると助作お氣をもませる是よて助作の氣をも
むを(善)其太平次と云へバ今親やの機次が噺しふの太平
次とお重の手をとり武藏の柴崎へ欠落をしたとの
事だが顔も似合ぬ色事したと云助作の悔りするお弁の以
前の譲り状を出して見て偏物ありと驚る助作の又悔り
しお重の跡追出んとするを善太の助作を捕へる(お辨)
の門口を此子の里扶持を拂ひ此我子を運て行と子を突
つける(お熊)女の横ばん切られ子を閉ざりにされるとい
世界中の馬鹿の振作弟與之助の手本もあれバ我も今なら
勘當じや(助作)そんなら私しを熊是くら先實の子の
累お好んだ短をとり家を譲るが樂しみじや(善)里扶持を
踏れる替りコウみみのへして呉ると善太お辨よて助作を
踏倒し門口に突出す助作の赤子を抱いたまへ門口は倒れ
る(助)モ、おつかさんお憎しみゆ尤でいふり升るが
今此處を出されて乳香を抱へた此助作長ふといやませ
ぬとぞ今夜だけと内へは入るふとするとお熊雛子の

湯を汲助作の顔へぶちかけるに助作のわつと押へて倒る
る三人の宜い氣味だど笑ふ助作のやうく起上ると熱湯
のためは片顔赤みあり口をしき仕打(助)あまるといへバ
(熊)エ、早くうせぬりト門口を切る助作の赤子を抱よ
残念と白眼を幕
○四幕目 浮屋敷物見の場
本舞臺浮屋敷物見前の休愛へ仲間四人と夜露妻賣と
物争いをして仲間が鎌と振あげるところへ傳吾の出て是
を止めるとたんに鎌を用水桶の中へ飛す皆々向ふへは入
る後物見の障子で明と中(三津三)のお重が後ろ手は縛
れ旗つりを掛苦るしんで居る愛へ傳吾が出來り今夜四
ツの鎌を打迄よ心を定め刑部様も色よい返事をせぬよ於
ての手討おすると云聞のして奥へ入後侍女のお霜が來
猿轡を取つて湯を香せ介抱するお重の硬箱を引よせ遺書
をか、んと中を見ると密書の一通よくくみるお千葉家
の悪人刑部の奸計是よて兩人驚る其事柄と書置く所へ

傳吾が出來りお霜が手拭を取りしを怒り又々お重は猿轡
をかけるお重の遺書を膝の下へ隠すお霜傳吾の奥へ入
る跡頃もあり向ふより以前の助作赤子を懐中に入れてん
やりと鳥眼とあり出來り物見の下へお重の不實伯父の
非道を恨み赤子を見て愁ひの仕打物見の中よりお重の助
作を見ても猿轡細めのためは物いはれず泣かおしみ以前
の遺書を膝へて下へ落す愛へ仲間四人出て助作を運立る
助作の死ぬより外は思案あしと立上るを傘屋落しある手
紙を仲間が懐中へ入れてやる是よて助作の向ふへは入る
お重の跡を見送る所へ刑部が出來り色よい返事をしると
責る愛へお霜が出て留る刑部の助作の今家來よし付殺
しよやつたゆゑ心残さず抱れて寝る(お重)悪人刑部も隨
がはんや(刑)扱の悪事を聞たるのと怒り刑部刀を振お重
お霜を殺す(重)夫婦此世を去るとても恨みを叫んで置へ
さかど血眼おあると切倒す道具廻る
○同返し 絞瀬川土手の場

本舞臺二重土手向ふ上下數疊正面浪の書割都て入江堤
の休愛へ以前の助作出來り南無阿彌陀佛と身を投んとす
る處へ(權十郎)の權六(壽美之丞)の若徒惣助出來り止め
權六の助作お金を思ひ助作を落せしお重の遺書と見て刑
部の悪事を知り權六の急いで向ふへは入後(小國次)の金
五郎と太平次が出來り鎌おて助作をさふり殺しおして川
へ打込愛へ刑部出來り兩人お金を渡す(金)私し尸殿の愛
妾お績と以前よりして深い中と手紙を見せる刑部の悦び
悪事を断し明鏡に此金五郎が借よお預りやて居升ると三
人立上る時川の中より助作の人魂出扱は助作のお化のど
刑部白眼愛へ(高助)の祐天上人出て四人の無言場よて幕
○五幕目 千葉家濱御殿の場
本舞臺左右一間半宛の手摺付の中二階座敷真中風雅な
る出入りの門其前石垣上手蘆原の影よ船二艘あり都て濱
御殿の休愛へ侍仲間二人出て傳愛妾のお績儀へ不義を
し掛一權六を召捕と叫よりの仰渡され早く捕度物と皆々

上手へは入る後向ふより金五郎出来り下手の中二階へ磔を打是よて(芋)モシ侍て居たわいさト芋積障子を明る金五郎の松の木を登り部屋に入るより(芋積)金五郎の傍へ寄添色氣の仕打よて此程おまへの頼の通り安しは權六が不我を仕掛しと跡方ある事と思へ共殿へ上上たゆゑ今宵の内よ郎を連れて退ひて下さんせト着類を見てエ、おまへくしい此血しほり(金)手めへの親の佐兵衛のためみ生して置て不都合助作と殺して来たと聞くお蕪ろく芋積の手を取り立上る時腰お差たる鑓を落す(金)モウ此品いらぬト門の前へ投捨金五郎の帯を解色合の仕打よて障子をみるト唄みさり上手より權六出来りて小石を拾ひ上の中二階へ磔を投ると障子を明て累侍女の拵(よて待風情權六の松の木を傳わり二階よ上る(累)のモシ權六さんやう来て下さんしたと膝よすたる(權六)彼の月星の名鏡の紛失より養父權左衛門どの、落度は皆我實父刑部殿の奸計よて鏡と奪せ主家を押領せんとの深き工み

此上の實父お諫言し後聞入れなき時討捨て切腹せん我所存(累)芋積が君へ權六が不我を仕掛しと諷言せしゆゑ此場お居るの御身のふため死ぬ時わ鏡の陰謀もあらず貴君よ懸名付て殿の怒も増事ゆゑ一先郎を立退ひて私しの親里堀越方へ身を隠し時節を待て下さんせ(權)死を止まり身を忍ぶよ此儘でいと兩人元服をせんとする時與よて累さんと呼よ驚き明火を吹消障子をみる後下手の障子明芋積金五郎風呂敷包を背負おれり門外よ待て舟の内より手をた、くを合圖に舟へ乗こめと兩人與へと入る後正面の門を開き權六累の手を引出来る此時金五郎が拾し鑓よて累足を切權六の鑓を取り上げ見て(權)此鑓の過日真間の里わて曲者お打ちけし鑓あるよ如何して此所よ「此鑓よ即付し御身が親の名を繼て今より堀越與右衛門と改ためんと(累)必らず見捨て下さんすあト立上り累の着替を取つて來升とらんを引おがら門の内へは入る權六の鑓と腰よはし柴垣の内へ隠れる愛へ以前の金五

郎尻はしより頬冠りをして門内より出来り船の内へ忍ぶ跡より芋積手さぐりよて出来る續いて累出来る此内金五郎上手權六下手より出で芋積の權六お引れて船の内よ入る累の金五郎と手を引舟おは入る双方取違ひて進退くトクンに洩ドロ、よあり二ツの火もえる淺黄幕切て落す

○舞臺一面川の遠見二艘の船をもやい左右の船より金五郎權六出て手を洗う時金五郎の助作の死骸を引上る權六のい重の死骸を見る死骸の兩人の家またより恨みを晴さで置べきかど白眼「右圖次二役の累」是を見て驚く死骸を水中へ突込累芋積の起上り初めて金五郎權六を見て男の違しを互ひに胸り累の金五郎の袖を持(金)エ、化者めがト突倒す芋積の鏡を拾ひ懷中に入れ權六よ見とれる舟の双方へ分れる水中より助作お重の亡靈出るを幕切

○六幕 飯沼弘經寺の場

本舞臺都て弘經寺開帳場の体爰よ前幕の雲太下駄番をして居る爰へ開帳参りの老若出て返る後累と母お熊金五郎

向ふより出来る上手より里娘二人出て累さんハ宜い婿さんと持おさんしたとおふる(累)金五郎を見ておまへと歩行の外聞が悪い(金)エ、化者め手切おはしよ居る物の手前を運て歩行と人が見る跡へ下つて來い(熊)佐兵衛より金を借り手切をやるから其時に出ていさ(金)金さへ渡せり今も出るよ此筋の演詞渡つて皆々祐天和尙へ參詣せんと念佛を唱へおがら本堂へは入る後(金)芋積の如何したるふと思案の處へ(團若)の山梨支番出来り二百兩を出してコレ金五郎兼て其方よ預け置いた鏡を渡しと呉る(金)頭をかき其鏡の芋積お預け置し處女の行衛の今よ知れずト云玄拵の驚るさ金五郎よ追る爰へ太平洋が出て芋積の内へ歸つて居ると告るそんから篤と索つて見やうと三人の上手へは入る後向ふより權六の與右衛門傘を冠り拵お織よて芋積佐兵衛下女と供よ進出來本堂前よて(佐)コレ與右衛門殿せいと娘芋積の嫁よ成つて下されと追る處へ累出来り與右衛門を見てヤアおまへハ我夫

權六様と云を孝積の累を突のけ此與右衛門様の私しの鐙
さんと兩人争とふ所へ以前の金五郎出来り孝積の胸ぐら
を取りて(金)此金五郎を捨て外の男を鐙と取るといふて
い女と打て掛るを佐兵衛が止手切を遣るうら孝積の手を
切り累を女房と持てと云(金)手切の入りぬ孝積のかれの
女房とする左もかければ刃の前だぞ(孝)モ親父さん早
く金五郎づらの手を切て與右衛門さんを鐙として下さん
せいさア(累)私しの子送妊せし權六さん何で孝積さん
渡そふぞいさア兩人戀あらしする(佐)コレ與右衛門と
の鏡ははしくハ娘の鐙も若も入らね何國へあり共と云
捨佐兵衛孝積金五郎お痛ハ本堂へは入る後累ハ權六の
膝ふすがり子の有る私しを振捨て孝積さんと夫婦も成る
とい恨めしいと歎くを權六ハ累をいたわり鏡の手も入る
其上の必らず夫婦も成る程も暫時心を静め待て居てと頼
む爰へ若徒惣助出来り今宵中お鏡の手も入らぬ其時ハ
養父おハ切腹權六ハ無念の涙おむせび累ハ是を聞泣々

得心する處へ本堂より佐兵衛孝積出来りて(佐)鏡殿得心
がいつたから今宵の祝言(孝)サア〜ムんせいさアト累
に是見よがしに與右衛門の手をとり皆々向ふへは入る後
累ハ泣伏處へ以前のお弁お善太が来り(善)與右衛門と孝
積ハ邸お居る内より深い中よて累をだまし孝積を連れて此
里へ逃来り(弁)其上よおまへの腹お子があつてハ縁切
ぬゆゑ此おろし藥を呑して呉ると頼まれた(善)アノ男が
累さんをさらうも尤此鏡を見おと奉納の鏡を累お突付見
せる累ハこは〜見て面相の異りしと胸くりし(累)扱ハ
私しの面の異りしをいみさらけ捨たるの恨めしや今に思
ひ知らせて呉ん此行先ハ絹川堤先へ廻つてト嫉妬の面相
血ばしり鎌を持て惡鬼の如く向ふへ馳行後に金五郎出来
り孝積を切れてたまる物うと追馳出るをお弁善太が止る
を振拂ひ向ふへ行を幕
○七幕目 絹川堤累ころしの場
舞臺草土手其前蛇籠をふせ土橋の下川流上手よ辻堂あり

都而絹川堤夜の体爰に「權六」の與右衛門孝積辻堂よ腰を
かけ雨を凌いで居る雷の音はげしく孝積ハ與右衛門よ抱
付と色仕掛よて鏡を取らんと孝積の懷中へ手を入れるよ
其鏡ハ親父さん預けたと聞残念ある仕打あて(孝)鬼の
こゝ内此辻堂でと與右衛門の手をとる折り辻堂の内より
(累)鬼ハ此處よ居るわいなアト立上る足よて兩人胸くり
「孝積ハアレエと取付累ハ辻堂より出来る孝積ハ土橋の
上迄逃るを累ハ追馳引戻し(累)よふも〜此私をだまし
て夫婦おあるふとい男畜生人であし女め逆も生して世べ
きや逆よて逃そふかと孝積をねじ伏手を喰付擲さちらし
て振廻すよくも男を寐とつたるよ鎌を取つて殺そふとす
る與右衛門ハ其手を押へ(與)コレ累狂氣したのと取りか
さへんとして宛る「累ハ氣絶をする(與)怪我のなき内少
しも早く(孝)そんなら先ハと脇差をとり孝積ハ一ツさん
よ向ふへは入る後累を介抱する累ハ「むつくど起上り
助作が乗うつり「恨めしやこたの實親刑部が爲お夫婦

非業お死をとげし元ハといへハお熊佐兵衛めが我子の孝
積累お家を譲らんと「むつくもわたりし恨みの魂魄累を
片輪よし此上ハ血筋おた〜り助作の非業も死せし恨みの
刃と怒る「與右衛門ハ胸くり扱ハ死體の祟りうと看るを
累ハ殺せ〜と鎌を振廻すとたんお手グ廻つて切る「累
ハ人殺しとさけぶ(與)慙然おからもト切倒す爰へ(右團
次)二役の谷五郎出来り與右衛門お仔細を問水葬禮あす
るがよいと谷五郎ハ辻堂よは入る「與右衛門ハ累の死骸
を川お投入れ行んとする時土橋の上へ累の亡霊出る此
處右團次四度の早替の禾「金五郎出来り谷五郎と三人無
言場よて鎌ハ金五郎の手も入る與右衛門ハ向へ逃行幕
○八幕目 法恩寺村怪異の場
平舞臺上方床の間次ハ佛壇香樂神林と記したる位牌を
直し門口ハ菅沼隱居と印したる妻札都て佐兵衛宅の坊寺
の和尚と百姓多勢葬禮と婚禮との馳走よあり皆々與へ行
爰へお熊太娘の累を殺した弟の佐兵衛よ相違おいと表

より泣込「サア娘を生して返せと云を」お辨太夫仲裁
 に入り殺した人の外は有ると云時、高屋の者谷五郎が女房か
 菊も赤子を抱せ出来り内に入るを佐兵衛に見て勘當せし
 與之助何しよ来た(興)勘當されたら父清三郎より此家の
 此谷五郎の女房が病が養ふ此子の物うぬらひ變らず出で
 うせると「家附のお重を刑部(二百兩)賣し事より助作
 をむとくして非業の死をせよせし其時に「拾いあげた
 る此助吉お重の腹は出来たり正しく此家の相續人と
 争ふと處へ權六の奥右衛門出て拙者の芋續と云(谷)
 扱ひ土橋で逢たト「云を打消す爰へ金五郎太平次出来り
 鎌を證據(金)芋續を女房み呉るか夫が出来ずいお尋者
 の權六を代官所へ訴へ(やうか)佐)恐れながらと出たされ
 鎌を盗んだ賊の金五郎命がいらね出るが(金)命
 を捨訴人をする立懸るを權六止めて何事も初夜を打迄
 待たされト云是よて金五郎の上手皆々奥へは入る後谷五
 郎の權六の先代よりの主家来る事を語り「祐天の守札

を門口に張谷五郎の鶴の事を問訊さんと蚊張の内へ「權
 六の此内同向をせんと奥へは入る後「奥より和尙出来り
 門口へ出る「ドロン」にあり累の亡靈出て門口の守札を
 取つて呉ると頼む和尙の振へなごら札を取り逆ては入累
 の仕掛物よて格子をぬけ蚊張の内へ仕掛よては入る「是
 より和尙の「芋續のアル累さんかんよんしてと苦るしむ
 (二役)谷五郎蚊張の外へ半身出て何も居せぬと云芋續
 の尙苦しむ爰へ「祐天上人出来り死靈の祟りを成佛させ
 ん皆々有難しと祐天を先よ奥へは入る後金五郎刀引さげ
 太平次の鎌を持出来り鏡の金五郎が受取刑部様お届けん
 と一ツさんよ向ふへは入る後「芋續の自殺して佐兵衛の非
 道を諫此内を助吉よ渡して呉と頼祐天再度出来り累を成
 佛させる「谷五郎權六の金五郎の跡を追かけ行芋續の落
 入る道具廻る
 ○鎮守八幡宮の祭禮場爰へ鎌を持金五郎出来る跡より谷
 五郎權六来て金五郎を殺し鎌を取りうへすと上手より西

入權左衛門お菊出て寶の手よ入りしを祝ふ爰へ佐兵衛祐
 天よ連れられ出来り髪を切徒弟と名を智光と改め一家
 の死靈を同向せん一同目出たしくト幕
 ○第二番目 隅田川高樓
 序幕 高屋細手道の場 同阿佐谷一ツ家の場
 本舞臺所々松の立木稻むら都て武藏國高屋細手の休爰
 百姓大勢出て竹槍を持猪狩をせねばあらぬと渡り演詞
 あつて皆々上手へ這入る後向ふより(權十郎)の犬田小文
 吾角力上り脚半わらんよて出来り(小)日の聲ぬ内下線
 へと入らふと思ひの外道が遠く暮て仕舞つト舞臺へ懸
 る所へ跡より手負猪と(銀之助)の並四郎の出来りて猪が
 荒れて並四郎を牙お掛ける「小文吾の是を見て猪をそり
 殺し並四郎を介抱せるよ「並四郎の漸く蘇生禮をのべる
 をり小文吾が鳥渡落せし金包みを見て賊心か増一此先の
 隅田の渡しと止つて居ると偏り小文吾を私くしの一ツ家
 へとまれト云小文吾の悦び猪を並四郎よ遣て上手へは入



跡(並)成程金の銀だきアト、涙の音で道具廻る

○正面二重上の方一間反古張の障子都て阿佐谷の里一軒
家夜の体爰(小園次)舟出ト「馬加大肥の四天王坂田金
平太「渡邊綱平羽織袴大小拵へよて腰をうけて居て(綱)

十六年跡並四郎の盗みし千葉家の寶、嵐山の尺八を渡せ
(舟)大肥様千葉家を手の内よにさる嵐山の千貫をら
安の物金があけれハ渡されぬと云是非あく綱坂田ハ上手
へ返る後向ふより以前の小文吾出来り並四郎より請取り
し火打袋を出して(小)高屋繩手て猪のため小並四郎が
氣絶せしを助け猪を差上し種とて今宵の宿をするとの進
めみ参りました「舟出ハ厄介者の來と云仕打又氣を
へ内へ通し蚊張をつり上手の一間(小文吾を寐らし舟出
も障子の内へと入る後向ふより以前の並四郎酒肴を持ち
出来り手さぐりみて内へ入るト障子の内みて(舟)マアお
横にお成りささりませ(並)浮氣女房ゆる油断があらぬと
云仕打よて跡へ引さがる處へソツト舟出出来り外へ出て

並四郎は逢小文吾を殺そよと云寤談して並四郎の向ふへ
は入る舟出ハ膳をしらへをする(舟)内の人の寄合よいつ
たときうせて道具廻る

○本舞臺一ツ家奥の体爰お布團を敷その上小文吾座し
「油断のさらぬ今宵の宿ト云内舟出ハ膳と酒を持ち出来
り色合の氣ぐみよて小文吾酒を進むる「小文吾ハ一猪
口のみ(小)並四郎腹のへらぬとやら私しハ免を蒙る
と蚊張の内よは入る後舟出ハ行燈の火を消惡婆の仕打ふ
て下手障子の内へは入るト後「短き夜半の子の刻を合圖
よ歸る並四郎勝手覺へし裏口ト(並)壁の破れより忍び足
よて入きたり蚊張の四角を切落し上よ跨さんとする
を「小文吾ハソツト蚊張を出並四郎の首を落し「舟内鏡
盗人入りしと呼よ爰へ舟出出来り夫の殺されしを見て驚
く「小文吾ハ夫婦一ツ穴の賊ゆる切捨んと云を身の御命
を歎く小文吾ハ舟出を助ける「舟出ハ命の恩とて嵐山
の尺八を送り小文吾お留主を頼み寺へ行くとて表へ出る

「跡お小文吾ハ尺八を元の押入へ隠し割木を錦の袋の中
へ入る折「竹ばら寄太鼓の音聞へる道具廻る

○同鳥越山狩鞍の場

舞臺一面山組の道具都て鳥越山麓の体爰お代官畑上語呂
五郎(團若)捕手六人を連提灯をさらへ居るト以前の舟出
出て夫を害せし狼藉者ハ嵐山の尺八を所持するゆゑ此處
お侍もふけ召捕てくだされ頼む代官ハ聞届ける是よて
舟出ハ上手へは入るト向ふより小文吾松明を持出来るを
六人一時取巻きソツトはげしき立廻の末侍主水出来
る其後向ふより(高助)千葉之助自胤狩鞍の体よて供廻り
を大勢運出来りソレ狼藉者を召捕と指令よより組子皆々
かより小文吾を組伏繩を掛る是よて千葉之助真中の床几
よ懸り(千)曲者の何國の者よて罪を犯し嵐山の尺八を如
何して所持するや是よて小文吾ハ前夜猪を打殺し並四郎
を助け一夜がりせし處並四郎が忍び入り拙者を切らんと
せしゆゑ首を落し又尺八ハ舟出より拙者へ送り呉んと云

しゆゑ不正の品と心得割木と入れかへ嵐山の尺八ハ元の
押入お返し置し事を立るお一職の主水よ付尺八の有
所と並四郎の検査を付ける「主水ハ蹄立り尺八を持参し
並四郎の變死ハ小文吾を切らんと蚊張の上より刀をさし
たるハ全く並四郎が悪事と立るよ「舟出ハ隠し持たる
出刃庖丁よて小文吾よ切掛る「小文吾身をかはし舟出を
蹴る「殿ハ小文吾の明白武勇を賞美繩を許し「舟出ハ縛
め餘義の筋を畑上お付らるゝ是よて小文吾ハ悦び平
伏する(千)犬田とやらを館へ伴お馬加大肥よ付「も
ておしの義を致してよからふト舟出を引立るを幕切

○二番目馬加大肥邸場 同大奥酒宴の場

本舞臺都て大肥邸庭先の体爰よ渡邊綱平坂田金平上よ代
官語呂五郎を細おけ舟出の有家を調べる事あつて代官
ハ上手へ引行跡大肥出来り落葉小笹の刀ハ手よ入つたが
ト云時妻の(花友)戸敷と俵鞍彌吾の出て父大肥お悪事を
諫言する此時上手柴垣の内(右園次)品七何ひ居る大肥

鎌倉の御前此上ハ小文吾を身方ハ付給食より時寄し女
田樂朝毛野朝霧ハ酔をさせ酒宴せんと云付る道具廻

○平舞臺正面金襴愛(傳五郎)大記小文吾(團若)九念次
渡邊坂田酒宴の席(高助)朝毛野朝霧朝きり出て舞の振
事わり此内高助座敷の様子ハ眼を付る早舞の折ハ桃の花
のかんざしを小文吾の刀へ打付置處へ戸まき目録を以て
出て田樂へ送る舞子三人奥へは入る跡小文吾刀ハ立し
んざしを見て不審の思ひ入ふて道具まはる

○同座敷庭先の体爰ハ朝毛野朝霧朝きり朝霧休息の處へ九念
次出来るハ朝毛野ハ小文吾の居間を聞く爰(以前の管を
侍女が返しよ来るより柏の葉ハ歌を寄掛樋の水ハ流し小
文吾の居間へ送る件よて道具廻る

○同茶座庭先の体上手ハ掛樋あり水の流れハ樋ハ柏の
葉の来ししと小文吾取りわけ見る處(品七が膳を持ち出
来り外へ出るとたんに卜部季六忍びよては入り来て石燈
籠の陰へ隠れる小文吾ハ膳を向ひ食事をして毒ハ嘗り苦

しみ陥入るを見て季六小文吾ハ切掛る此時松の上ハ朝毛
野居て管しを打て季六を殺し小文吾ハ仇討の助太刀を頼
む小文吾ハ毛野の武藝のためしみんと兩人立廻りと成る
こハ品七出来り双方を止むる小文吾ハ品七を切品七ハ
手負とかり共ハ助太刀を頼む「小文吾聞き届る處へ朝霧
が五六郎朝霧を頼出來りて首を落す高助さつと成るを幕
○大記對牛樓二階場都て隅田川遠見の書割爰ハ大記渡邊
坂田酒宴の處へ大記妻戸まき悴鞍彌吾娘出て大記ハ又疎
言をする大記用す三人自害する跡毛野出來り色仕掛よて
附入十六年跡父相原首の仇大記覺期と立廻りの末トハ大
記を殺して大立廻りとなり二重次第よせり上り下座敷ハ
小文吾居て二階下共立廻りよて今日ぞ父の仇討本望とげ
ハア有難や忝けなやと上下よて恨バシやナアト打出し
○明治十六年六月廿日御届同廿八日出板 (定價七錢)

本郷區元町一丁目七十五番地平民
編輯兼出版人 小野塚利右衛門
發兌元 同所 松 應 堂